

コロナ禍における初年次教育科目のクォータ的運用と 対面／非対面による経験学習の試み

田中亜裕子

関西国際大学

1. はじめに

2020年、関西国際大学(以下、本学という)は三木、尼崎キャンパスに神戸山手キャンパスを加えた三つのキャンパスと六つの学部を有するに至った。そしてこの年の1月、国内で最初の新型コロナウイルス感染者が発見された。全国の新入生は大学にほとんど足を踏み入れることなく、思い描いていたものとは程遠い大学生活を強いられることになった。本学の1年生も同様に入学前後の数日間の登校ののち、入校を制限された。

当時の本学のコロナ対応をふりかえると、4月23日より遠隔によるライブ授業をほぼすべての科目で開始した。そして6月には学生が授業形式を選べるハイブリッド授業に切り替えた。さらに秋学期に全学対面授業への舵を切った。しかしながら、新型コロナウイルス感染を気にしながらのマスク越しの大学生活は、学生間、学生教員間にも微妙な距離をもたらした。そしてコロナ禍以降、デジタル化・オンライン化が急速に進む中、「果たして自分は大学で学んでいるのだろうか?」という新入生の不安の声が届いた。その不安に応えるべく実施した取り組みの一つが、初年次教育科目のクォータ的運用である。

そして本学の特色の一つである経験学習もコロナ禍のあおりを受けた。本学では看護学科を除くすべての学科が経験学習を2単位の選択必修としている。経験学習はサービスラーニング(以降、SLと略する)、グローバルスタディ(以降、GSと略する)、インターンシップの3種類から構成されており、学生は卒業までに2単位(1～2プログラム)の経験学習プログラムを受講することになる。コロナ禍においても経験学習を継続するという方針のもと、海外プログラムについてはオンライン実施を中心に、国内プログラムについては対面での活動を提供し続けた。

本稿では初年次教育科目のクォータ的運用と対面／非対面の経験学習が1年生に及ぼす教育効果と課題について、科目担当者へのアンケート結果を踏まえながら報告することを目的とする。

2. 初年次教育科目のクォータ的運用¹

2022年度より、基礎的スキル系の初年次教育科目を春学期前半で実施し、春学期後半でつまづきのある学生をフォローアップする試みがスタートした。この試みは、新入生のスキルアップ、専門領域への興味関心を深めることを目的とした初年次教育改革として位置づけられている。対象となる科目を単純に現状の講義内容そのままに、半分の期間で詰め込むものではなく、教育方法・指導の改善を一層進めていくことを目的として実施された。

2022年度春学期に試験的に導入されたクォータ的運用の流れを図1に、対象科目を表1

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
春学期 (15週)				夏学期		秋学期 (15週)		
ICTリテラシー2単位 (2コマ/週)		※その他の科目はセメスター制						
学習技術2単位 (2コマ/週)								
専門基礎2単位 (2コマ/週)								
→不合格者フォロー								
8週/クォータ		7週 + α /クォータ						

図1 クォータ的運用の流れ

表1 クォータ的運用対象科目

	春学期前半	春学期後半
科目名	初年次教育科目 (2単位) ・ ICT リテラシー ・ 学習技術 ※いずれも全学科必修科目	学科の専門基礎科目 (2単位) 【2022年度春学期実績】 ・ 教育福祉学科：教育学概論 ・ 心理学科：犯罪学概論 ・ 観光学科：日本の文化 ・ 社会学科：情報ネットワーク演習

表2 初年次教育科目 (クォータ的運用) の成績結果

科目名	特徴的な結果
ICT リテラシー ※社会学科は科目なし	・ GP0(不合格者) の人数が, 6学科すべてで減少 ・ GP4(成績優秀者) の人数が, おおむね横ばいか減少傾向 ・ 全学科総計では, GP0 の割合が4ポイント減少
学習技術	・ GP0 の人数が, 7学科のうち4学科で減少, 3学科で同じまたは微減 ・ GP4 の人数が, おおむね横ばいか減少傾向 ・ 全学科総計では, GP0 の割合が5ポイント減少

に示す。春学期前半に「ICT リテラシー」と「学習技術」の初年次教育科目を、春学期後半に学科の専門基礎科目を配置し、週2コマで授業を実施した。「ICT リテラシー」と「学習技術」は第15回の授業が終了する春学期中間地点で成績評価を行い、不合格であった学生には学期後半の個別サポートを提示した。希望者はサポートを得て個別学習を行い、学期末に再評価され、合格であれば60点評価、不合格の場合は再試対象となった。

2022年度のクォータ的運用科目である「ICT リテラシー」と「学習技術」の成績結果を表2にまとめた。「ICT リテラシー」についてはGP0(不合格者)の人数が6学科すべてで減少した。そしてGP4(成績優秀者)の人数は、おおむね横ばいか減少傾向となった。全学科総計ではGP0の割合が4ポイント減少した。「学習技術」についてはGP0(不合格者)の人数が、7学科のうち4学科で減少した。そして3学科で同じまたは微減した。GP4(成績優秀者)の人数については、おおむね横ばいか減少傾向となっており、全学科系ではGP0の割合が5ポイント減少した。

これらの結果から、クォータ的運用のメリットとして学習支援対象者を早期に発見し個別サポートを実施したことで、不合格者が減少したことがあげられる。一方デメリットとしては授業進度が速いことが影響したのであろうか、成績優秀者が減少したことである。

表3 初年次教育科目担当者のコメント

担当教員コメント	
学生にとってのメリット	基礎的スキル科目を早期に終了できる。 短期集中で学習できる。 忘れないうちに授業が続く。 他科目に修得スキルの活用ができる。 要フォロー学生は学期後半で支援が受けられる。 友人関係が形成されやすい。
学生にとってのデメリット	開始後、PC 環境にバラつきがあるため理解に差が生まれる (ICT リテラシー)。 大学生活に不慣れな時期に負荷が集中している。 低スキル者には、時間が必要。授業進度が早い。 コロナ等で休んだ場合のキャッチアップが困難である。 クォータ制科目があるため履修できない科目がある。
その他の意見	期間中の学生へのフォローと重要なポイントのリマインドに工夫が必要である。 担当教員が学生指導に集中できるよう業務配慮が必要である。 SA を置いた方がよい (ICT リテラシー)。 PC 設定支援の時期を前倒しにすることが必要である (ICT リテラシー)。 2 科目 (学習技術, ICT リテラシー) とともにクォータ制で実施するのは負荷が大きい。 クォータ制の学習効果が期待できる運用とする必要がある。 (セメスター制の時間割でクォータ制を実施することは効果が期待できない)。 習熟度クラス分けを行い、高スキル者は単位認定してはどうか。

表3は「ICT リテラシー」と「学習技術」の担当教員に対するアンケートのコメントをまとめたものである。学生にとってのメリット、デメリットともに、授業進度が速く、早期に終了することが影響しているようである。メリットは、基礎的スキルを短期集中で学習することで、習得したスキルを他科目に活用できること、週2コマのペースで進むため、授業内容を忘れずにいられること、学期後半でフォローが受けられることなどであった。

一方、デメリットは授業準備期間が短いために PC 環境が整わないままに授業がスタートしてしまう新入生がいること、大学生活に不慣れな時期に負荷が集中すること、低スキルであった場合、授業進度が速すぎることで、欠席した場合のキャッチアップが困難であること、そしてクォータ制科目が春学期前半に2科目あることで、他科目を履修しづらくなることなどの指摘があった。

その他、運用改善につながる意見として、習熟度クラス分けや SA を置くなど、授業終了後だけでなく授業期間中の学生へのフォロー体制の必要性が指摘されていた。またセメスター制の時間割で一部をクォータ制で実施することの難しさ、そして担当教員への業務配慮が必要とのコメントもあった。

次に、春学期後半の専門基礎科目の成績結果については表4にまとめた。「情報ネットワーク演習」(社会学科)は GP0 の人数が増えた。「教育学概論」(教育福祉学科)と「日本の文化」(観光学科)は、GP4 の人数が減少し、GP1 の人数が増加した。そして「犯罪学概論」

表4 専門基礎科目(クォータ的運用)の成績結果

科目名	特徴的な結果
情報ネットワーク演習	・ GP0 の人数が、増加
教育学概論	・ GP4 の人数が減少、GP1 の人数が増加
日本の文化	・ GP4 の人数が減少、GP1 の人数が増加
犯罪学概論	・ GP4 の人数が増加、GP1 の人数が減少

表5 専門基礎科目担当者のコメント

	担当教員コメント
学生にとってのメリット	集中して学習できる
学生にとってのデメリット	提示する情報が過多となり、消化不良を起こしていた課題の分量が倍になる
その他の意見	学生への負荷が大きいため、通常の形の方が学べそう

(心理学科)は GP4 の人数が増加し、GP2 の人数が減少した。

このように、春学期後半の科目については成績上のメリットは認められず、デメリットは春学期前半科目と同様、成績優秀者の減少が課題となった。知識・スキルの定着期間が短縮されたことが影響しているのではないと思われる。

また、科目担当者に対するアンケートに寄せられた意見を表5にまとめた。学生のメリットとしては集中して学習ができることであるが、提示する情報が過多となること、課題が集中することなどのデメリットが挙げられており、成績結果からも学生への負担が大きいたことが示唆された。

3. 対面／非対面による経験学習の試み^{2,3}

表6,7はSLとGSのプログラム数と受講者数の集計である。主に国内プログラムが中心となるSLについては、カウンターパートナーの協力のもと、ほとんどのプログラムで対面による実施が可能となった。コロナ禍においてもプログラム数、受講者数は増加していることがわかる。一方、GSは海外プログラムであるために、一部国内プログラムを除いて、すべて非対面プログラムでの実施となった。プログラム数は横ばいであるが、受講者数は減少している。

次に表8はSLについて1年生の履修者数と割合を示したものである。コロナ前の2019年とコロナ禍の2020年以降を心理、教育、英語、経営で比較すると、学科間で傾向に違いが認められる。全学年でみると受講者数は増加傾向であったにもかかわらず、1年生の受講者数割合が減っているのは心理、経営であり、教育は横ばい、英語は増えていることがわかる。

図2は2021年度生に実施した「大学への適応過程に関する調査」のアンケート項目「対人面でうまくいっている」の回答結果である。SL不参加者の回答と比較すると、SL参加者の回答は秋学期に平均値が上昇していることがわかる。

次に学生が対面／非対面の経験学習をどのように体験したのかを知る手がかりとするた

表6 プログラム数, 受講者数 (サービスラーニング)

		プログラム数	対面	遠隔	閉講	プログラム数計	受講者数	受講者数計
2020 年度	三木	8	8	0	0	17	80	217
	尼崎	9	9	0	0		137	
2021 年度	三木	5	3	1	1	29	36	285
	尼崎	8	6	0	2		40	
	山手	16	14	0	2		209	
2022 年度	三木	5	5	0	0	43	37	468
	尼崎	7	6	0	1		58	
	山手	31	27	0	4		373	

表7 プログラム数, 受講者数 (グローバルスタディ)

	プログラム数	海外	国内	オンライン	閉講	受講者数
2020 年度	27	0	5	14	8	310
2021 年度	29	0	5	15	9	258
2022 年度	29	8	6	10	5	191

表8 サービスラーニングプログラムの1年生履修状況

年度	2019			2020		
学科	履修者数	1 年 履修者数	1 年履修率	履修者数	1 年 履修者数	1 年履修率
心理学科	70	42	60.0%	57	4	7.0%
教育福祉学科	42	42	100.0%	64	62	96.9%
英語コミュニケーション学科	39	27	69.2%	56	49	87.5%
経営学科	17	16	94.1%	40	24	60.0%
社会学科						
観光学科						
合計	168	127	75.6%	217	139	64.1%
年度	2021			2022		
学科	履修者数	1 年 履修者数	1 年履修率	履修者数	1 年 履修者数	1 年履修率
心理学科	120	9	7.5%	222	29	13.1%
教育福祉学科	40	39	97.5%	39	39	100.0%
英語コミュニケーション学科	45	42	93.3%	54	47	87.0%
経営学科	33	29	87.9%	46	16	34.8%
社会学科	38	36	94.7%	107	38	35.5%
観光学科	9	8	88.9%	10	1	10.0%
合計	285	163	57.2%	478	170	35.6%

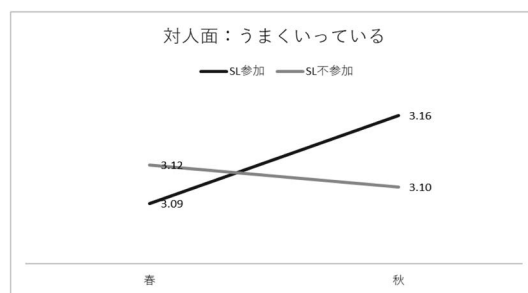


図2 「対人面でうまくいっている」の回答比較

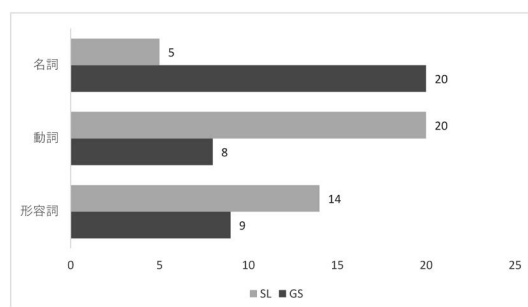


図3 ふりかえりの記事に出現した語の比較

めに、学生が記述した学期末のふりかえりを対象に分析を行った。全学生の「成長確認シート」(2020年度～2022年度の春夏学期，秋冬学期の2回)の学期末のふりかえりのうち、「サービスラーニング」，「SL」，「グローバルスタディ」，「GS」という語が含まれる記述を抽出した。「サービスラーニング」，「SL」という語を含む記述(以降，SL記事)の数は75，「グローバルスタディ」，「GS」という語を含む記述(以降，GS記事)の数は35であった。3年間のSL受講者970名のうち7.7%がSLに関するふりかえりを記述しており，GS受講者759名のうち4.6%がGSに関するふりかえりを記述している。このことから対面実施のSLのほうが非対面実施のGSよりも学生に与えたインパクトは大きかったことが伺える。

そしてSL記事とGS記事の出現語をテキストマイニングで比較した。SL記事にだけ出現する語とSL記事によく出現する語の総数は39語であり，GS記事にだけ出現する語とGS記事によく出現する語の総数は37語であった。これらの記事の出現語数を品詞ごとに比較したものが図3，抽出された語句の一覧が表9である。SL記事に出現する語は動詞，形容詞が多いのに対し，GS記事に出現する語は名詞が多いことがわかる。このことから想像されるのは，他者との直接的なかわりを通した学びは，リフレクションの場面においても身体感覚を伴う記憶として具体的に思い起こされるのではないかということである。このように学びの質という点からみても，経験学習が対面で行われることの意義は大きいと考えられる。

最後に非対面で実施されたGSに焦点を当て，オンライン学習の利点と課題を取り上げる。表10にGSプログラム担当者のふりかえりからオンラインの利点と課題を抽出した。コメントをまとめると，経験学習をオンラインで実施する必要に迫られた担当者の苦労が課題という形でにじみ出ており，オンライン環境と学生，教員のオンラインスキルがプログラムの成否に影響するという記述が多数みられた。一方，オンラインの利点に関するコ

表9 GSに関する記事とSLに関する記事の出現語

品詞	GS記事だけに出現する語	品詞	SL記事だけに出現する語	品詞	GS記事によく出現する語	品詞	SL記事によく出現する語
形容詞	しんどい	形容詞	難しい	形容詞	厳しい	動詞	感じる
	少ない		新しい	動詞	行く		考える
	うまい		深い		向ける		しまう
	しにくい		分かりやすい		わかる		分かる
	すごい		興味深い		行ける		とる
	早い		辛い	名詞	作る		学べる
	規則正しい		わかりやすい		授業	名詞	もらう
	面白い		上手い		グローバルスタディ		サービラーニング
動詞	働く		伝わりやすい		経験		今後
	始まる		低い		インターンシップ		
	思える		忙しい		遠隔		
			悔しい		学生		
名詞	海外		正しい		先生		
	グローバルスタディ		浅い		コロナ		
	アメリカ		持つ		小学校		
	カンボジア		書く		現地		
		動詞	取り組める		大学		
			抜く		実践		
			抱える		プログラム		
			あたる		交流		
			つなげる		対面		
			付く		現場		
			含める				
			始める				
			終わる				
			落とす				
			過ごす				
		名詞	レポート				
			心理学				
			地域				

表10 オンラインGSの利点と課題

オンラインの利点	オンラインの課題
・オンライン上の様々な機能を使うことで、参集しなくても学習効果を上げることができる。 ・オンラインの特色を活かし、様々な機能を活用しながら、どの活動に誰がどれくらい参加しているのかわかるように工夫した。その結果、フリーライダーがいなくなり、グループワークが円滑に進んだ。	【学生】 ・PC設定、Wi-Fiの環境など、事前の確認を十分に必要がある。 ・学生のオンラインスキルが必要である。 ・学生のビデオ on について十分に議論する必要がある。 ・フリーライダーの問題がある。 ・個別の状況が把握しにくい。 【教員】 ・教員のオンラインスキルが必要である。 ・オンラインでなにをするかという設計のところに改善すべき課題がある。 【環境】 ・依頼先のオンライン環境がプログラムの成否に影響する。

メントは少なかったが、オンライン機能を活用し、学生の活動への参加状況を把握することで、オンライン上のグループワークを円滑に進めたプログラムもあった。これらのことから、オンライン学習はオンライン環境そして担当者と学生のスキルがプログラムの成否に大きく影響することは否めないが、条件が整えばオンラインの様々な機能を活用することで、フリーライダーの防止のみならず、学生個々人の学習プロセスを可視化し共有できるという可能性が示唆された。

4. ポストコロナに引き継ぐこと

コロナ禍における本学の取り組みの中から、初年次教育の充実を図るうえで検討したい点を三つあげる。

第一につまずきのある学生に早期に寄り添うための仕組みづくりである。セメスター制の中で初年次教育科目のみをクォータ制科目として進めることには、今後、様々な検討が必要であるが、中間評価を活かすなど、つまずきのある学生をできるだけ早くキャッチアップできる体制づくりが望まれる。

第二に体験型プログラムの1年次履修の活性化である。実感を伴う学びを大学生生活の初期に経験することは、その後の適応につながるものと思われる。

第三にオンラインの機能を用いて学生の学びのプロセスを可視化することである。フリーライダーの防止のみならず、学生のメタ認知的視点の獲得につながる可能性が期待できる。

コロナ禍によってこれまで推奨されてきた様々な教育手法を封じられたことで、初年次教育は大きなダメージを被った。しかしその一方で、これまでの教育手法の意義を再確認したり、新たな可能性を手に入れる貴重な機会となった。この経験を積極的に活かしていくことで、初年次教育の新たな展開が期待される。

注

¹ 図1と表1～5は本学高等教育研究開発センター作成の「2022年度クォータ制科目運用検証」から引用した。

² 表6、表8は本学の社会連携課から提供されたデータをもとに筆者が作成した。

³ 表7、表10は本学の国際交流課から提供されたデータをもとに筆者が作成した。